

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立長良特別支援学校

学校番号

103

自己評価

<p>学校教育目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 校訓（目指す児童生徒の姿） 「仲よく 明るく たくましく」</li> <li>2 教育目標（目指す児童生徒の姿を実現するためにどのような教育を行うのか） 児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育活動を推進し、こころ豊かにたくましく主体的に生きる力を育成する</li> <li>3 私たちのスローガン（校訓・教育目標を端的に表した言葉） 「元気な病弱教育」 （1）この学校で学ぶことで、児童生徒を元気にしていきたい （2）そのためには、保護者も元気にしていきたい （3）そのためには、私たち教職員も元気に働きたい （4）力を合わせて、学校も地域も元気にしていきたい</li> <li>4 今年度の教育の重点 （1）児童生徒を守りきる安心・安全な体制の整備・推進 （2）人とのかかわりを通して、豊かな表現力、自己肯定感を育てる教育の推進 （3）確かな学力と生きる力を身に付けることができる病弱教育の充実 （4）病弱教育の理解啓発の推進</li> </ol>
---------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

部	小学部
<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観や研究授業を通して、課題を明確にして授業内容を見直し、かかわり方や教材の工夫等を進めたことにより、児童が意欲的に活動に取り組むことができているが、更なる改善が求められる。</li> <li>・通学児童の学習のねらいに応じた、グループを越えた合同学習の設定と、訪問生を含めた児童相互のかかわりを進める取組が必要である。</li> <li>・居住地校交流や学校間交流における直接交流を通して、児童が自信や意欲をもつことができ、人とかかわる力を伸ばすことができたが、意義を相互に確認し児童の主体的な学びの場としたい。</li> <li>・複数の教員が訪問生の授業を行い情報共有することで、客観的な実態把握と授業評価を行うための話し合いが充実した。</li> <li>・教育活動に関するアンケートから、保護者が小学部段階でのキャリア学習についての具体的なイメージをもちにくいと分析した。児童の実態と家庭状況に応じた支援を、担任、キャリア担当、主事が連携して継続していきたい。</li> </ul>
<p>今年度の具体的なかつ明確な重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領への移行期間に応じて、病弱教育における授業実践と改善を積極的に行う。</li> <li>・各学習グループの児童の実態に応じた合同学習、及び他校との交流学习を計画的に実施し、児童の主体的な学びに向かう力をはぐくむ。</li> <li>・保護者や病院等と協力して、各訪問教育の場における授業の充実を図る。</li> </ul>
<p>重点目標を達成するための校内組織体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級及び学習グループ会と、グループ長・分掌長等の企画会の実施。</li> <li>・児童の健康状態の把握と、安心・安全に学校生活（訪問教育）を送るための家庭、病院等、保健室との連携。</li> <li>・部内の各分掌担当者の積極的な業務推進。</li> </ul>
<p>目標の達成に必要な具体的な取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教務部と連携し、有効な年間指導計画や記録、引継ぎ方法の検討を進める。</li> <li>・全校研究、教科等部会の機会を活用して、PDCAサイクルを基盤として積極的な授業検討を行う。</li> <li>・教科等と自立活動のねらいや指導内容の検討を中心に、教育課程の見直しを行う。</li> <li>・部会の2部構成を継続し、前半を議題等の検討、後半を児童理解の会と、授業の取組や児童の変容情報交換の会とする。</li> <li>・学校間交流や居住地校交流の意義を再確認し、児童相互のかかわりを深める工夫をする。</li> <li>・グループ会で、計画的に合同授業（単元）や行事をすり合わせ、企画会を継続する。</li> <li>・児童が部集会への見通しをもち、友達への関心をもてるように、掲示板設置を検討する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別の教育支援計画を活用し、合意形成したねらいに応じた授業展開を進める。</li> <li>・担当職員の授業力向上のために、ビデオを活用したショート検討（意見交換）の時間をもつ。</li> <li>・学校や居住地校でのスクーリングを計画的に進め、安全に実施する。</li> <li>・在学中から卒業後の家庭生活等でのQOL向上を目指して、キャリア支援を継続する。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領への移行期間に応じて、病弱教育における授業実践と改善を積極的に行うことができたか。</li> <li>・各学習グループの児童の実態に応じた合同学習、及び他校との交流学習を計画的に実施し、児童の主体的な学びに向かう力をはぐくむことができたか。</li> <li>・保護者や病院等と協力して、各訪問教育の場における授業の充実を図ることができたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の実態に応じた年間指導計画を立てることができた。</li> <li>・授業記録の様式を見直した。</li> <li>・全校研究会やビデオで研究グループ会を行うなど、積極的に研究授業に取り組み、授業改善につなげることができた。</li> <li>・訪問教育では事例を検討し合い、児童の実態把握や授業内容を見直した。</li> <li>・教育課程の見直しを行い、自立活動から音楽、図画工作へ移行した。（Dグループ）</li> <li>・それぞれの実態に応じた居住地校交流を行った。</li> <li>・学校間交流の意義を再確認し、児童相互のかかわりを深めた。</li> <li>・行事等の取組の中で、合同授業を実施した。</li> <li>・わくわくタイムで遠隔授業を実施した。</li> <li>・個別の教育支援計画を基に児童や保護者の願いを聞き取り、必要な支援を話し合った。</li> <li>・研究や教科部会等で、ビデオ研や教材の紹介、ミニ検討会を行った。</li> <li>・スクーリングを実施するだけでなく、遠隔授業を実施した。</li> <li>・学校での取組をビデオで撮って、訪問の授業で視聴した。</li> </ul>
評価の視点	評価
①新学習指導要領への移行期間に応じて、病弱教育における授業実践と改善を積極的に行うことができたか。	A ② C D
②各学習グループの児童の実態に応じた合同学習、及び他校との交流学習を計画的に実施し、児童の主体的な学びに向かう力をはぐくむことができたか。	① A B C D
③保護者や病院等と協力して、訪問教育における授業の充実を図ることができたか。	A ② C D
成果・課題	総合評価
<p>○前担任が年間計画を立てたことで、児童の実態に応じた計画を立てることができた。新1年生については、児童の実態に応じて年間計画に作り直すことができた。</p> <p>○授業の改善や児童へのかかわり方について共通理解を図ることができた。特に、授業研を行った学級では、新学習指導要領の3つの柱の視点から授業の工夫ができた。</p> <p>○ビデオで研究グループ会を行い、抽出児に迫る支援へと改善することができた。（Dグループ）</p> <p>○居住地校交流では、回を重ねるごとに、表情豊かに相手校の児童とかかわる姿がみられた。また、児童の願いを取り入れた活動を設定したことで生き生き活動する姿がみられた。</p> <p>○学校間交流では、相手校での出前授業を実施することで、相手校児童に本校児童の実態を理解してもらい、かかわりが深めるような活動内容を工夫することができた。</p> <p>○遠隔授業を部集会に取り入れたことで、通学生と訪問生が同じ小学部の仲間であるという意識を高めることができた。今後は訪問生の実態に合わせて遠隔授業の実施について検討しつつ、各施設との接続、スムーズな進行等を考慮して充実を図っていく。</p> <p>○児童が見通しをもち活動できるように、わくわく掲示板を設置したりした。</p> <p>○個別の教育支援計画を活用し、児童・保護者の願いを知ることができ、そのために必要な支援を保護者と共有することができた。</p> <p>○対象児童のミニ検討会をしたことで、実態を深め、授業での適切な支援につながった。</p> <p>▲校外学習は、前年度に計画を立てるために、実態の変化に合わせた計画が立てにくかった。</p> <p>▲互いに授業を見合う、授業や児童の様子について話し合う機会をもっと設定していくとよい。</p> <p>▲実態に応じたキャリア支援を進めていくための支援の一つとして、遠隔授業を検討していく。</p> <p>▲相手校からの依頼で2年生との交流も実施したが、本校側がすべて設定し、負担がかかった。</p> <p>▲わくわく掲示板については、児童が掲示板を見て興味をもてたかなど検証が必要である。</p>	A ② C D

▲学校での取組を訪問の授業で視聴するだけでなく、逆に訪問生の授業を通学生に紹介するという取組を増やす。	
来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の情報交換会については、部会で実施することが難しい場合は、各グループの学級通信をサーバーのLockの共有データに情報を入れておいていつでも見られることができるようにする。</li> <li>・長良東小学校2年生との交流については、要望があった場合、自己紹介と合唱交流とする。</li> <li>・1・2組の集団での学習を保障するため、合同授業が可能なように時間割の工夫をする。</li> <li>・グループ会を確実に実施するために、集まる時間の設定を工夫する。また、複数のグループにまたがる職員も参加できるようにするなどグループ会の柔軟なもち方を検討する。</li> </ul>

部	中学部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援機関や医療機関、訓練機関、専門家、養護教諭等と積極的に連携して支援会議を開催するなど、生徒の現状や将来に向けての課題について情報を職員間で共有し、個に応じた支援につなぐことができた。</li> <li>・保護者懇談を積極的に実施することにより家庭における生徒の様子への把握に努め、学校での様子も含めて部会やグループ会等を利用して職員間で共通理解を図り、チームで支援を行った。</li> <li>・ヒヤリハット、アクシデント事例が起きたときに職員間での話し合いを行い、同じ事案を繰り返さないよう改善策について共通理解することに努めた。</li> <li>・学習内容や授業時における生徒の様子、保護者からの話を基に、どのようなことに興味・関心を示すか、どのような課題の提示方法がよいか、どのような言葉かけがよいかなどの情報を共有し、チームとして生徒の支援に取り組んだ。</li> <li>・学習到達度チェックを活用し、生徒の理解度や興味・関心に合わせて授業内容を工夫したり、タブレット端末の活用や教材、教具を工夫したりして授業を展開した。</li> <li>・金華祭で、個々の特性に合わせた出番を設定した。</li> <li>・岐阜市少年の主張大会や障がい者スポーツ大会への参加、遠隔授業による他校生との交流を行う中で、学校とは異なる状況で自分自身を表現したり主体性を発揮したりすることができた。また、学校行事や生徒会活動において、他の生徒の前で話をしたり意見を発表したりして、リーダー性を養った。</li> </ul>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な病気や障がいを持つ個々の生徒の特性を把握し、将来に向けて必要な力が身に付くような支援を行う。</li> <li>・健康で安全な生活ができる環境を整える。</li> <li>・基礎的・基本的な知識や能力の確実な習得を図るとともに、主体性や社会性を養い、コミュニケーション能力や表現力・行動力を育てる。</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ会や部会、各校務分掌等が連携をとり、全職員で生徒一人一人にきめ細かい支援をする校内の体制を築く。</li> <li>・類型間の連携を強化し、部会等で情報を共有し、全職員で個に応じた対応と集団としての指導、支援を実施する。</li> <li>・保護者、養護教諭、外部の支援機関と校内の支援組織が積極的に情報共有を図り、連携して支援を行う体制を築く。</li> </ul>

<p>目標の達成に必要な具体的な取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援機関や医療機関、専門家等と積極的に連携を図り、生徒の支援に生かす。また、保護者懇談等を通し、生徒の家庭における生活実態や情報を把握し、全職員の共通理解の下で支援を行う。</li> <li>キャリア教育の観点や踏まえ、一年間を見据えた進路支援計画の下、個に応じた適切な支援方法を探り、部全体で取り組む。</li> <li>生徒の状況を踏まえた個別対応、支援内容の検討、職員配置を行い、全職員で支援に当たる。</li> <li>健康に関する正しい知識が身に付くよう指導するとともに、病気に対する自己管理能力の育成に努める。</li> <li>保護者や医療機関、養護教諭等との連携を強化し、日々の生徒の体調を把握し、それぞれに応じた支援を行う。</li> <li>生徒の状態や支援の方法等について職員間の情報交換を徹底し、学校生活により適応しやすい環境と安全等に配慮した支援体制で臨む。</li> <li>個々の教員の専門性を高め、生徒の興味・関心を引き出し、主体的に学び合う指導形態を工夫するとともに、分かる授業を実施する。</li> <li>行事や校外活動の在り方を検討し、社会性の育成に向け、生徒ができる範囲での主体的な活動を促す。</li> <li>生徒の表出方法について共通理解し、意思を汲み取って支援に役立てる。</li> </ul>
<p>達成度の判断・判定基準あるいは指標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援機関や医療機関、専門家、保護者等と積極的に連携し、個に応じた適切な支援が組織として実施できたか。</li> <li>一年間を見据えた進路支援計画に基づき、個に応じた適切な支援ができたか。</li> <li>自分の病気に向き合い、健康に気を付ける態度を育てることができたか。</li> <li>生徒の状態や支援の方法等について職員間の情報交換を徹底し、学校生活により適応しやすい環境と安全等に配慮した支援体制で臨むことができたか。</li> <li>生徒の興味・関心を引き出し、主体的に学び合う授業が実践できたか。</li> <li>行事や校外活動等、生徒ができる範囲での主体的な活動を促し、社会性が育成できたか。</li> <li>コミュニケーションの手段を増やし、自分の考えを表現する力を育てることができたか。</li> </ul>
<p>取組状況・実践内容等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切なタイミングでケース会議や支援会議を実施した。専門家の指導、助言や授業支援で受けたアドバイス、教職員間や専門家と意見を出し合ったこと等を常にグループ内や部内で共有し、授業や様々な指導の場面に取り入れた。</li> <li>保護者や支援機関、医療機関と連携して、個に応じた支援を組織として行った。特に、校外学習や行事の参加については、個々の細かな実態に配慮した方法、内容で実践した。</li> <li>生徒の健康面や心理面に配慮して、時間割や使用教室割を編成し、運営した。</li> <li>教室やトイレにおける適切なエアコンの使用や加湿器や濡れタオル、霧吹きを使用した教室の加湿を行い、生徒の健康の保持に努めた。</li> <li>教職員間や保健室、病棟、保護者と連絡を取り合って対応を考えたり情報を共有したりすることで、健康面に配慮した生活、学習や行事への参加ができた。</li> <li>D1の生徒とD2の生徒の教室を分けたことで、落ち着いて過ごす時間を確保することができ、安全な生活につながった。</li> <li>発作の回数や状況、サチュレーション等を毎日一定時間ごとに記録して生徒の実態把握をしていることが対応を検討する際の参考になり、発作等の緊急対応時には、関係する教職員が役割を認識して適切な対応を行った。</li> <li>ヒヤリハットの事例を活用した。</li> <li>生徒の実態や興味、関心に合わせ、個別授業だけでなく適宜集団授業を取り入れた。また、生徒の特性に合わせたツールを用意したり意思疎通の手段を用意したりして、生徒の意思を積極的に把握することに努めた。校外学習や行事、スクーリングの内容や参加方法等も工夫し、落ち着いた活動につながった。例えば4組では、音、光、匂い風、水、感触等、五感に働きかける様々な教材を工夫した授業を実践した。</li> <li>各活動に取り組む前に、授業を担当する教職員間で各活動のねらいや評価方法について話し合い、その内容を共有した上で授業を実施した。</li> </ul>
<p>評価の視点</p> <p>①様々な病気や障がいや有する個々の生徒の特性を把握し、将来に向けて必要な力が身に付くような支援を行うことができたか。</p> <p>②健康で安全な生活ができる環境を整えられたか。</p> <p>③基礎的・基本的な知識や能力の確実な習得を図るとともに、主体性や社会性を養い、コミュニケーション能力や表現力・行動力を育てることができたか。</p>	<p>評価</p> <p>A (B) C D</p> <p>(A) B C D</p> <p>A (B) C D</p>

成果・課題	総合評価
<p>○生徒の実態や状況を各機関や教職員間で共有し、生徒に合わせた指導、支援を実施した。</p> <p>○生徒の健康面や心理面に配慮した時間割や使用教室割の編成、教室環境の整備、類型でクラス、教室を別にしたことなどが、活動のしやすさや学習機会の確保につながった。また様々な事情で時間割や担当者の変更が必要になった際に、部内で協力して調整できた。</p> <p>○教職員間や保健室、病棟、保護者等と適切な時期に連絡を取り合い、情報を共有することができた。</p> <p>○生徒の実態や状況に合わせ、個別授業だけでなく集団での授業も行った。また、教具の準備や授業内容の工夫ができた。</p> <p>○事前の打ち合わせを密にして目標を明確にし、組織として授業やその他の活動を行った。</p> <p>▲防災を意識した教室内の物の配置が必要である。</p> <p>▲集団での授業や活動を取り入れたが、生徒同士がかかわることが難しかった。</p>	A ② C D
<p>来年度に向けた課題と改善方策案</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の実態差を踏まえ、グループ別あるいは他の類型と合同で行う活動を設定する。</li> <li>・校外学習や修学旅行では、様々な要素を考慮しながら企画を進める。</li> <li>・適切な時期にケース会議や支援会議を開催する。</li> <li>・支援についての引き継ぎは念入りに行う。毎授業時の引き継ぎでは、時間に余裕をもって教室に入るようにする。1時限目に保護者との引き継ぎがある学級の教員には、時間割上の配慮を加える。また、高等部への引き継ぎやアフターフォローの体制を整える。</li> <li>・一部の教員に負担が集中しない教員配置や業務分担を行い、皆で協力する体制を確立する。</li> <li>・教材や教具として必要なものを精査するとともに、防災を意識し、安全に配慮した教室内の物の配置や管理を行う。</li> </ul>

部	高等部
<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の病気や障がいの程度が異なり、身体機能、知的理解、コミュニケーション能力、基本的な生活習慣、社会的経験等において多様な実態がある。</li> <li>・過去の進路学習や進路情報等を活用しやすい形にまとめるとともに、進路決定に至るまでの系統的で具体的な進路学習の流れを検討し、進学や就職指導に生かす必要がある。</li> <li>・教員が指導法や授業力、専門性、資質の向上に努めるとともに、部全体の指導力が高められるよう教員同士が学び合う環境を整える必要がある。</li> <li>・「今大丈夫だから、これからも大丈夫」という意識を生まない体制をつくるため、危機管理について日頃から意識を高く保ち、十分な引継ぎや連絡により、全職員が情報共有の徹底を図る必要がある。</li> </ul>
<p>今年度の具体的なかつ明確な重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の病気や障がいの状態に応じた教育により、将来の社会生活や家庭生活、職業生活に必要な知識と技能、生活態度を身に付ける。</li> <li>・豊かな情操と個性ある表現力を身に付ける。</li> <li>・健康の保持増進と生活の安定を図る。</li> </ul>
<p>重点目標を達成するための校内組織体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が確かな学力や進路実現に必要な基礎・基本を身に付けるべく、あらゆる教育活動において効果的な指導を行うため、教員自らが指導法の改善や専門性と資質の向上に努め、研修等から得た知識や技能を授業実践に生かすだけでなく、知見の共有化を図り教員同士が学び合う組織を構築する。</li> <li>・生徒が創造性豊かな自己表現を獲得し、社会性やコミュニケーション能力を身に付ける手だてとして、多様な体験・表現及び発表や交流の場面を積極的に提供する体制を充実させる。</li> <li>・生徒が安心・安全な学校生活、家庭生活を送ることができるように、家庭や関係機関との連携を図りながら、教員間の共通理解に基づいた危機管理意識の高い支援体制を確立する。</li> </ul>
<p>目標の達成に必要な具体的取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が進路目標を明確にもち、やがては希望の進路を実現するため、教育活動のあらゆる場面でキャリア学習を進めるとともに、生徒の実態に応じて保護者や関係機関と緊密に連携してキャリア実習や居住地域実習等を実施する。</li> <li>・確かな学力や社会人として必要な基礎・基本を身に付けるために、生徒が系統的で具体的に取るよう3年間の進路学習の流れを明確にして指導に生かす。</li> <li>・困難さを伝える方法や喜び等の気持ちを表出する力、集団内での適切な言動を身に付けるため、人とかわる機会を増やし、ソーシャルスキルや表現力の獲得を図る。</li> <li>・教員が研修や日頃の実践から得た知識や技能を互いに学び合う体制を築くため、様々な機会をとらえ知見</li> </ul>

	<p>の共有に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な「みる・きく・ふれる・つくる」場を提供して、創造性豊かな制作や発表を行う。</li> <li>・表現（表出）力やコミュニケーション能力の伸長を図るため、ICT機器や教具等を積極的に活用するとともに、新しい教材を開発する。</li> <li>・自己肯定感を高めるため、コンクールや検定試験、行事等への積極的な取組を支援する。</li> <li>・精神的に不安定な状態の生徒が自己理解を進め、自立に向けて前向きに考えることができるように、保護者の理解や協力を得て効果的で継続的な支援を行う。</li> <li>・生徒の健康状態の維持と生活環境の改善のため、外部の専門家や各関連機関と密接に連携して保護者を支援するとともに、必要に応じてケース会議等を開催する。</li> <li>・生徒の安全を脅かすリスクの芽を早期に発見したり、緊急事態に適切に対処したりするため、ヒヤリハット事例の報告と蓄積を図るとともに、危機管理意識を高く保ち、常に全職員でホウレンソウを徹底して情報を共有する。</li> </ul>
<p>達成度の判断・判定基準 あるいは指標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が明確な進路目標をもち、進路希望が実現したか。</li> <li>・学力が向上し、社会人として必要な基礎基本が身に付いたか。</li> <li>・ソーシャルスキルや表現力の伸長がみられたか。</li> <li>・教員が互いに学び合う体制を築くため、様々な機会をとらえ知見の共有に努めたか。</li> <li>・多様な「みる・きく・ふれる・つくる」場を提供して、創造性豊かな制作や発表ができたか。</li> <li>・ICT機器や教具等を積極的に活用するとともに、新しい教材を開発したか。</li> <li>・コンクールや検定試験、行事等へ積極的に取り組んだか。</li> <li>・保護者の理解や協力を得て効果的で継続的な支援を行ったか。</li> <li>・関連機関との連携を図ることで保護者を支援し、生徒の生活環境を改善できたか。</li> <li>・ヒヤリハット事例を蓄積し、常に全職員でホウレンソウを徹底して情報を共有したか。</li> </ul>
<p>取組状況・実践内容等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路情報を的確にとらえ保護者や関係機関と連携して生徒の実態に応じた実習先や進路先を選定した。</li> <li>・各教科や自立活動等において、生徒の将来の進路や生き方につながる学習を実践した。</li> <li>・個別の教育支援計画を基に、生徒の特性（得意なことや苦手なこと）やニーズ、配慮事項を実習先等に提示してキャリア学習を進めた。</li> <li>・生徒が社会の一員としての必要な力を身に付けるため、学級や学年の枠を越えた合同授業をはじめ様々な場面で教員が横断的に協力し合い指導した。</li> <li>・教員が自分の担当以外の授業を見学したり、ICT機器の活用方法や研修した内容を共有したりして、互いに学び合う機会をもった。</li> <li>・生徒の社会性を身に付けるため、外部機関とも連携して支援ができた。</li> <li>・金華祭等の行事では、生徒が集団の一員として自ら考えて主体的に取組むことができるよう指導した。</li> <li>・生徒の興味・関心や実態を的確に把握した上で、積極的にタブレット端末や教具を活用して創作活動に取り組み、生徒個々の多様な創意や表現を引き出した。</li> <li>・日常のあらゆる場面をとらえ、絵本などの作品の製作を通して、生徒の表出を促す支援を行った。</li> <li>・生徒の実態を考慮し、できる状況作りを考え、個々の特性に応じた表現活動や創作活動ができた。</li> <li>・授業支援の専門家や外部機関（医師、看護師、理学療法士、臨床心理士等）と連携し、助言を生徒の支援や指導方法に取り入れた。</li> <li>・身体緩めやSST等のコミュニケーション活動等を通して、心の安定や身体の機能維持を図った。</li> </ul>
<p>評価の視点</p>	<p>評価</p>
<p>①一人一人の障がいの状態に応じた教育により、将来の社会生活や家庭生活、職業生活に必要な知識と技能、生活態度を身に付けることができたか。</p>	<p>A (B) C D</p>
<p>②豊かな情操と個性ある表現力を身に付けることができたか。</p>	<p>A (B) C D</p>
<p>③健康の保持増進と生活の安定を図ることができたか。</p>	<p>A (B) C D</p>
<p>成果・課題</p>	<p>総合評価</p>
<p>○生徒が様々な活動を通して自分のもっている力を伸ばすことで、少しずつ自信が深まり、自己肯定感が高まった。</p> <p>○日頃から教員間で学び合い、情報を共有し合う雰囲気が醸成されつつある。</p> <p>○外部機関と協力して生徒の支援に当たるネットワーク（連携体制）を構築できた。</p> <p>○様々な実習や進路学習、自立活動等を通して、自己理解のもと自分に合った無理の無い進路決定をすることができた。</p>	<p>A (B) C D</p>

	<p>○職場見学等を通して働く雰囲気を感じ人とのかかわりを楽しみながら活動することができた。</p> <p>○検定試験や学校行事に主体的に取組、達成感を味わい自己効力感を高めることができた。</p> <p>○ICT機器の利用等、時宜にかなった表出を促す日常的な支援により、生徒の表現やコミュニケーションの力を伸ばすことができた。</p> <p>○教員は生徒の心や気持ち、身体の安定を図るために、専門家等の意見も取り入れ、心身の状態を常に職員全体で気を配りながら継続的に支援をしたことで生徒の不安定な状態が改善された。</p> <p>○教員間及び教員と看護講師の連携が深まり、適切な支援を部内に広めることができた。</p> <p>○臨床心理士と生徒との面談を定期的に設けたことで、生徒の実態をより詳細に把握し、支援方法を考えていくことができた。</p> <p>○授業ごとの教員の入れ替わりも多かったが、教員間で生徒について共通理解し、指導を行っていくことができ、こまめな検温によって生徒の状態変化を早期に発見し対応することができた。</p> <p>▲お互いの学びの場を見付けたり、積極的に実践例を交流できたりしたらよりよかったと思う。</p> <p>▲精神的に不安定な状態の生徒の支援について、担任を中心に保護者と共通理解しながら進めたが、部全体での場は報告のみとなることが多く、部全体で問題解決となる話し合い等をもつことが難しかった。</p> <p>▲学級の教員が他の種類の授業に多く入っていたため難しい点があった。</p>	
<p>来年度に向けた課題と改善方策案</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路実現に向け、外部機関との連携・社会資源の積極的な利用をはかる。</li> <li>・教員が指導法や授業力、専門性、資質の向上に努めるとともに、部全体の指導力が高められるよう教員同士が学び合う場を設ける。</li> <li>・「今大丈夫だから、これから大丈夫」という意識を生まない体制をつくるため、危機管理について日頃から意識を高く保ち、十分な引継ぎや連絡により、全職員が情報共有の徹底を図る。</li> </ul>	

分掌	教務部
<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会全体において働き方改革が進み、今後は、予想されるキッズウィークの導入等による年間の行事や学習計画の見直しが求められている。</li> <li>・働き方改革が進み、概ね残業時間数が減少し、職員全体の意識が高まってきている。</li> <li>・病弱の児童生徒の実態に見合った学校行事や学習活動が整備されつつある。</li> <li>・新学習指導要領を踏まえた「年間指導計画」の作成を行った。その実践・評価を基にして改善し、また「個別の指導計画」の運用を進めていく必要がある。</li> <li>・新学習指導要領の移行期間（小学部・中学部）となり、様々な検討や試行的な取組を基に、『資質・能力の三つの柱』についての理解を深く浸透させていく必要がある。</li> <li>・準ずる教育課程から訪問教育まで、全てのグループにおいてタブレット端末をはじめとするICT機器の利用が広がっている。今後は、更なる情報教育分野の教材開発とその共有化を推進していきたい。</li> <li>・県立学校図書システムの活用を進め、外部図書館との連携等の運用をしていきたい。</li> <li>・情報機器をはじめ教材備品等の職員の管理意識が不十分なことがある。</li> </ul>
<p>今年度の具体的なかつ明確な重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働き方改革をさらに進め、児童生徒及び職員が安心・安全に学校生活を送り、またPDCAサイクルによる学習活動の充実を図るため、二期制の年間計画を作成し、学校全体の中で包括的に検討する。</li> <li>・新学習指導要領を深く理解し、「年間指導計画」の改良及び「個別の指導計画」の様式変更を進め、運用を始める。</li> <li>・情報教育分野の教材開発と図書システムの運用を推進し、教材備品等の管理等を適切に行うため、職員全体への研修等を推進する。</li> </ul>
<p>重点目標を達成するための校内組織体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二期制を具体化させるため、年間行事計画を各部・各分掌等と繰り返し練り合わせる。</li> <li>・新学習指導要領の理解を深めるため、研究・研修部と連携して学習会を継続的に行う。</li> <li>・「年間指導計画」の改良、「個別の指導計画」の様式変更を進めるため、キャリア支援部の「個別の教育支援計画」と連携し、年間の運用の軌道に乗せる。</li> </ul>
<p>目標の達成に必要な具体的な取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時数の配分、長期休業の在り方、キッズウィークの動向、学習のPDCAサイクルの時期等、様々な観点から考慮して二期制による年間行事計画を立案する。</li> <li>・H31年度の各部・各分掌の取組について、時期の変更調整を図る。</li> <li>・「年間行事計画」による教育実践を踏まえ、運用する上での様式の変更点等を見直す。（小・中）また、新学習指導要領の『資質・能力の三つの柱』を踏まえた「年間指導計画」を作成する。（高）</li> <li>・「年間指導計画」の取組を基に、「個別の指導計画」の様式を変更し、運用する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科学習、訪問教育、遠隔授業等、様々な実践に役立つタブレット端末をはじめとするICT機器の校内研修会を段階的・継続的に開催する。</li> <li>・児童生徒及び職員が図書システムを一層活用するために整備を進め、周知を図る。</li> <li>・情報機器をはじめ教材備品等の所在、管理状況を自己点検する日を設ける。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二期制による年間行事計画の検討が進んだか。</li> <li>・新学習指導要領の理解の下に、「個別の指導計画」の運用が開始できたか。</li> <li>・職員の情報機器の管理意識が高まったか。また、ICT機器の活用が広まったか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二期制の年間行事計画を立案に関して、臨時休校等があっても授業時間を確保できるよう、年間授業日数を200日程度設けた。</li> <li>・二期制移行の趣旨や意義について、運営委員会や職員会で共通理解を図った。</li> <li>・二期制移行の説明を2月の学校評議員会とPTA総会にて行った。</li> <li>・カリキュラム・マネジメントを踏まえ、それに基づいた新様式を検討した。</li> <li>・個別の指導計画の説明会を行い、全職員で共通理解を図った。</li> <li>・PDCAサイクルが実施できるよう、個別の指導計画のスケジュールを立案した。</li> <li>・携帯用タブレットを全ての学級に割り当てるとともに、有料アプリの購入手順を明確化して利用を推進した。</li> <li>・情報教育分野の教材開発やICT機器の校内研修に取り組むことができなかった。</li> <li>・図書システムの引継ぎに時間がかかり、システムを利用した図書の貸し借りの開始時期が遅れてしまった。</li> </ul>
評価の視点	評価
①二期制による年間行事計画の検討が進んだか。	Ⓐ B C D
②新学習指導要領の理解の下に、「個別の指導計画」の運用が開始できたか。	A Ⓑ C D
③職員の情報機器の管理意識が高まったか。また、ICT機器の活用が広まったか。	A B Ⓒ D
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>○各部や各分掌と連携し、十分な授業日数を確保し、ゆとりある行事計画を行うことができる二期制の年間行事計画を立案することができた。</li> <li>○二期制の意義や変更内容について、全職員で共通理解を図ることができた。</li> <li>○保護者や学校評議員に対して二期制移行について説明を行い、意義や変更内容を周知することができた。</li> <li>○カリキュラム・マネジメントの理念に基づき、PDCAサイクルで運用できる個別の指導計画の新様式を整備することができた。</li> <li>○カリキュラム・マネジメントの取組や個別の指導計画作成の様式変更について、全職員で共通理解を図ることができた</li> <li>○個別の指導計画の来年度から運用に向け、在校生分の計画を次年度へ引き継ぐことができた。</li> <li>○携帯用タブレットの授業での活用が進んだ。</li> <li>▲二期制の意義を生かせるように、各部、各分掌と連携しながら年間行事等の運営を行う。</li> <li>▲放課後の会議について取組方等について検討し、必要に応じて見直すなど働き方改革を更に進める。</li> <li>▲全ての保護者に二期制移行について周知するために、今年度末の個別懇談時や4月のPTA総会等の場を活用する。</li> <li>▲個別の指導計画がPDCAサイクルで運用できるよう、学習グループで検討できる時間を確保するとともに、取組状況の把握を行う。</li> <li>▲新学習指導要領の趣旨や内容が個別の指導計画や年間学習計画に反映されるよう、職員への情報提供や働きかけを行い、理解をより浸透させていく。</li> <li>▲備品や教材の管理方法を周知徹底し、職員の管理意識を高めていく。</li> <li>▲情報教育分野の教材や遠隔授業の取組について情報収集し、校内での取組推進に生かしていく。</li> <li>▲図書システムの引継ぎを確実に行うとともに、新年度当初から図書館運営が円滑に進むように、今年度中に児童生徒情報の登録を行うなどの準備に取り組む。</li> </ul>	A Ⓑ C D
来年度に向けた課題と改善方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二期制の年間計画の下、働き方改革や教育活動のPDCAサイクルが図られるよう、運営に取り組む。</li> <li>・新学習指導要領に基づいた個別の指導計画の作成と運用を通して、内容理解の浸透やカリキュラム・マネジメントの実現が図られるよう、リーダーシップをとる。</li> <li>・情報教育分野の情報を積極的に発信し、教材活用や遠隔授業の取組の活性化を図る。</li> </ul>

分掌	生活支援部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登下校における安全指導においては、個々の通学方法に合わせて、毎日支援できた。また、警報や気象に応じた対応をした。</li> <li>・ドリームアート展、各種作品展やイベント等に参加し、児童生徒の創作活動や表現活動を校内外に発信し、自己有用感をはぐくむことができた。</li> <li>・ひびきあい週間・月間においては、あつたかマートツリー活動やあいさつ運動、人権啓発放送を行った。掲示物作成においては、児童生徒、保護者、職員も参加し、「ありがとう」の気持ちを込めたメッセージを伝え合った。しかしアンケートより、保護者にはまだ十分な理解がなされていないので、今後も早期から周知をしていく必要がある。</li> <li>・児童生徒の病気や障がいの状況、個別の配慮やかかわり方等について全職員で情報交換や共通理解を図った。</li> <li>・教育相談に関しては、研修会や教育相談だよりの発行を行い、教育相談に関する職員の意識の向上を図った。また、教育相談月間に生徒のヒアリングを行い、様々な変化に早期に気付くことができるように努めた。</li> </ul>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒が学校生活を安心・安全に送ることができるための支援</li> <li>・児童生徒の実態に応じた、自己肯定感をはぐくむことができる支援</li> <li>・児童生徒・保護者一人一人を尊重し、受容的に接することができる支援</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活支援部員一人一人が責任をもって役割を果たし、会議や研修会を通して全職員に共通理解と連携のとれる体制作りを行う。</li> <li>・児童生徒が活動する意義や喜びを感じ、部を越えた交流ができる取組を、他分掌や創作活動担当者と連携しながら行う。</li> <li>・全職員が児童生徒や保護者一人一人を尊重して受容的に接し、信頼関係を築くことができるような取組や職員研修を行う。</li> </ul>
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクールバスの安全運行のために、連携・連絡を密に行う。（担当者会、バス会社・添乗員、保護者との連携・連絡、連絡カード等）</li> <li>・毎日登下校時校門にて、安全指導とあいさつを交代で行う。また、旗当番を他の分掌の職員にも協力を依頼する。</li> <li>・交通安全教室や保健安全部と協力して安全指導（防犯訓練等）を計画する。</li> <li>・自己肯定感や連帯感を高めるために、児童生徒会活動、MSリーダーズ活動、学校行事等の部を越えた児童生徒の交流等を積極的に行う。（あいさつ運動、全校集会、昼の放送、金華祭、ボランティア活動等）</li> <li>・放課後活動のチーフ会や担当者打ち合わせ会を行う。（担当者会等）</li> <li>・充実した創作活動・表現活動ができるように、創作活動担当者との打ち合わせを行年間を通して計画的に</li> </ul>

	<p>実態に応じた授業を行う。(教科会、担当者会、グループ会等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人権感覚を磨いたり、受容的な教育相談や寄り添う指導を行ったりできるように、職員研修やスクールカウンセラーを活用する。また、取組をたよりやホームページ等で保護者に発信していく。(職員研修会、職員会、教員のチェックシート等)</li> <li>・職員の危機管理意識を高め、日常的・定期的な教育相談を継続し、問題の早期発見と迅速な組織支援ができるように、児童生徒情報交換会を行う。また、状況に応じて、他分掌や他部、コア・ティーチャー等と連携した支援体制を作る。(児童生徒情報交換会、職員会、部会、グループ会、ケース会等)</li> </ul>
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心・安全に学校生活を送ることができる支援ができたか。</li> <li>・児童生徒が自己肯定感をほぐくむことができる支援ができたか。</li> <li>・情報共有や研修を行い、一人一人を尊重した受容的な支援ができたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全指導として毎日登下校時に校門に立ったり、自力通学生生の通学経路の危険個所の確認をしたりした。また、警報や気象に応じた対応をした。</li> <li>・交通安全教室を実態に応じて行うとともに、MSリーダーズや児童生徒会を中心として交通安全活動に取り組んだ。また、学校前の道路の交通安全について警察からアドバイスを受けた。</li> <li>・捜索訓練では、訓練後の反省を生かしてマニュアルや地図等細かな部分の修正を行った。</li> <li>・不審者対応訓練では、本番を想定して授業時間に訓練を行った。</li> <li>・児童生徒会やMSリーダーズが中心となり、あいさつ運動や募金活動、ボランティア活動を行った。</li> <li>・ドリームアート展、各種作品展等に参加し、児童生徒の創作活動や表現活動を校内外に発信した。</li> <li>・ひびきあい週間・月間においては、あったかハートツリー活動やあいさつ運動、人権啓発放送や人権だより発行等を行った。</li> <li>・全職員の人権意識の向上やいじめ問題等の未然防止・早期発見を図るべく、教員のチェックシートによる啓発を行った。</li> <li>・教育相談に関しては、研修会や教育相談だよりの発行を行い、教育相談に関する職員の意識の向上を図った。また、年間2回の教育相談月間に児童生徒のヒアリングを行い、様々な変化に早期に気付くことができるように努めた。その後担当者会議をもち情報共有した。</li> <li>・スクールカウンセラーの配置に伴う保護者と教職員の相談を年間9回、研修を1回実施した。</li> </ul>
評価の視点	評価
①安心・安全に楽しく学校生活を送ることができる支援ができたか。	A ② C D
②児童生徒が自己肯定感をほぐくむことができる支援ができたか。	① A B C D
③情報共有や研修を行い、一人一人を尊重した受容的な支援ができたか。	A ② C D
成果・課題	総合評価
<p>○スクールバスの運行では、大きなトラブルなく一年間運行できた。</p> <p>○登下校時の旗当番は、管理当番や部注事が入ることで生活支援部員の負担が減り、助かった。</p> <p>○創作活動や表現活動を、金華祭やドリームアート展、各種作品展等で校内外に発信することで、表彰されたりコメントをいただいたりして、自己肯定感をほぐくむ取組となった。また、金華祭について1日半の日程で実施し、児童生徒の実態に応じた活動となったので、来年度も継続実施する。</p> <p>○ひびきあい週間・月間(人権教育)においては、あったかハートフラッグ活動やあいさつ運動、人権啓発放送や人権だよりを発行することで、児童生徒、保護者、職員も参加した「ありがとう」の気持ちを込めたメッセージを伝え合ったり、人権感覚を啓発したりする取組となった。</p> <p>○教育相談においては、研修会や教育相談だよりの発行を行うことで、教育相談に関する職員の意識を高める取組ができた。教育相談月間では、生徒のヒアリングを行うことで、様々な変化に早期に気付くことができるように努める取組となった。</p> <p>○スクールカウンセラーが配置されて3年となり、今年度も保護者や職員対象の相談や研修の機会となった。</p> <p>▲児童生徒の乗車に関する岐阜希望が近特別支援学校や保護者との連絡が不徹底なことが時折あった。</p> <p>▲アンケートより、人権教育の取組について保護者から「わからない」との評価を受けた。「あったかハート」の言葉や取組が周知されているので、アンケートの質問文に「あったかハート」を加え、保護者に人権教育の取組を伝わりやすくする。</p> <p>▲教育相談系を中心に児童生徒の情報共有はできたが、全校職員への周知という点で、不十分な所があった。</p> <p>▲さわやか相談室は、今年度は水曜日と限られていて、参加できない保護者の方もみえたので、いろいろな曜日や時間を設定するなど、より利用しやすくなるような方策を検討する。</p>	A ② C D
来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクールバス運行について、両校担当者、関係者(添乗員)、担任、保護者間での連絡を引き続き密にし、乗車票の改訂・電話・メールでの確認、教室等への掲示を利用した確実な連絡に努める。また校外学習時にトラブルが起きたときの対応について確認をする。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドリームアート展について、反省を受け、目的や時期、開催方法や案内状、広報等周知の在り方を検討する。また他分掌の協力を得ながら、作品の搬入・搬出、土日勤務の在り方についても検討する。</li> <li>・児童生徒に関する情報共有の在り方では、各部会や分掌会、運営委員会での報告を受け、必要に応じて職員会で、児童生徒理解の場面で児童生徒の現状・対応についての共通理解をしていく。</li> <li>・危機管理意識を高め、迅速に組織で対応できる安心・安全な学校となるよう実際的な訓練や研修を行う。より実態、現状に適した体制を確認していくため、警察を中心に外部機関との情報交換を行い、連携を深めていく。</li> <li>・保護者には、各種たよりの他、年間計画や前年度の活動をホームページに掲載することで、分掌の取組を分かりやすく発信・周知していく。</li> </ul>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

分掌	キャリア支援部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中・高のつながりを意識したキャリア教育の実践に努めている。</li> <li>・生徒の課題を踏まえ、個々に応じたキャリア実習を実施しそれを通し、自己理解を深めたり、進路選択につなげたりしている。</li> <li>・部懇談やPTA総会の際に保護者向けに本校のキャリア教育についての説明をしているが、参加保護者の減少がみられ、理解を深めるまでには至っていない。</li> <li>・「キャリア支援通信」では、小・中・高等部にかかわる情報やキャリア教育の実践を掲載している。</li> <li>・「個別の教育支援計画」を生徒や保護者と合理的配慮等の内容について、年3回の懇談会の際に確認し、次の学年や卒業後の引継ぎ等に活用している。</li> <li>・外部の関係機関と連携し主治医面談や支援会議を開き、児童生徒の支援を行っている。</li> <li>・保護者アンケートの「他の機関ときめ細かく連携して進路支援を行っている」の項目では小・中学部保護者から「わからない」という回答が多かった。本校のキャリア教育の実践内容を保護者へ継続的に伝えていく必要がある。</li> </ul>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒の発達の段階に応じたキャリア教育を推進する。</li> <li>・教員間で連携を図り、個々の課題に応じた校内支援を行う。</li> <li>・家庭や学校間、医療、福祉等の関係機関と連携し、進路等の支援を行う。</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部教務や担任と連携し、キャリア教育の視点から行事等の教育活動を推進する。</li> <li>・部主事や担任、コーディネーター、コア・ティーチャーと連携し、校内支援を行う。</li> <li>・各部担当者（進路指導主事等）を中心に、児童生徒や保護者のニーズを把握し、情報発信を行ったり必要に応じて外部機関との連携を図ったりする。</li> </ul>
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部では、取り組む支援や内容について再度整理し、進路を見据えたセミナーやキャリア実習等を系統的、段階的に行い、進路決定につなげる。</li> <li>・小・中学部では、担任と連携し個々の課題に応じて、居住地域実習や学校見学等を実施する。</li> <li>・小学部段階からキャリア教育の意義や重要性について保護者の理解を深めるために、PTA総会や懇談、キャリア通信等の機会を利用し、具体的に説明していく。</li> <li>・部主事や担任と連携し、児童生徒の情報を共有したり、個人懇談に入ったりして、訪問教育も含む児童生徒や保護者のニーズを聞き取り、必要とする情報提供を行う。</li> <li>・「個別の教育支援計画」の作成や内容確認を通して、QOLの向上やキャリアの視点から必要と思われる福祉サービス等の利用を推進する。</li> <li>・児童生徒の状況に応じて、担任や部主事、コーディネーター、コア・ティーチャーと連携し、主治医面談を</li> </ul>

	<p>行ったり支援会議等を開いたりして、次の支援へとつなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハローワークや障害者就業・生活支援センター、福祉事業所等の機関や相談支援専門員等と連携し、進路支援を行う。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中・高の各部におけるキャリア教育（進路指導）の課題に沿って、段階的に実践ができたか。また保護者への理解啓発を図るための取組ができたか。</li> <li>・校内の職員間で連携し、児童生徒や保護者のニーズに沿った情報提供をしたり、支援を行ったりすることができたか。</li> <li>・関係機関と連携し、支援会議や移行支援会議を開催し、個々の課題に応じた支援ができたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後の生活をイメージし、生徒一人一人の興味や適性、生活状況を踏まえ、担任、部主事、部の職員と連携しキャリア実習を行った。</li> <li>・大学進学希望者を対象に外部模試を実施し、現在の自分の到達点を知る機会とした。</li> <li>・各部の段階における課題に応じて、居住地域実習を実施した。</li> <li>・進路決定に向けて学校見学を行った。</li> <li>・保護者にキャリア教育の重要性の理解を図るためにPTA総会で説明会を行ったり、部の懇談会で話したりする機会をもった。同様に職員研修会や職場見学を実施した。</li> <li>・担当者が個人懇談に参加し、個別の教育支援計画の確認を通して、保護者の思いや願い等を聞き取り、求められた内容の情報提供を行った。</li> <li>・個別の教育支援計画様式2の防災における追加事項について検討した。市町の課や専門機関や県看護協会等から情報収集し、地域生活欄の在宅時の防災対策の記入について、災害時にどのように行動するかという観点から見直した。</li> <li>・児童生徒の課題に応じて支援会議を開き、専門家を始め、医療、福祉の関係機関と連携し支援に当たった。</li> <li>・担任や部の職員、部主事と一緒に障害者就業・生活支援センター、福祉事業所等の機関や相談支援専門員等と連携し、進路支援を行った。</li> </ul>
評価の視点	評価
①小・中・高の各部におけるキャリア教育（進路指導）の課題に沿って、段階的に実践ができたか。また保護者への理解啓発を図るための取組ができたか。	A (B) C D
②校内の職員間で連携し、児童生徒や保護者のニーズに沿った情報提供をしたり、支援を行ったりすることができたか。	A (B) C D
③関係機関と連携し、支援会議等を開催し、個々の課題に応じた支援ができたか。	(A) B C D
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>○職員間で連携しキャリア実習を行い、実習を通して生徒の自己理解を深め、次の課題を知る機会とし、進路選択・決定へとつなげることができた。</li> <li>○進路説明会を実施したり、キャリア通信を通して情報発信をしたりして、保護者のキャリア教育への理解を深めることができた。保護者アンケートの評価も上がってきている。</li> <li>○個別の教育支援計画の地域生活欄における在宅の防災対策について検討し、それを提案することができた。</li> <li>○懇談等で保護者から求められた進路先や福祉サービスに関する情報を提供できた。</li> <li>○必要に応じて専門家や外部の関係機関と連携し、支援会議等を開き、児童生徒の課題に応じた支援をすることができた。</li> <li>○担任、部主事等とともに、生徒や保護者の思いを汲み取りながら、関係機関と連携し進路支援ができた。</li> <li>▲将来に対する不安を抱えている保護者は少なくない。保護者が求める情報提供の仕方や支援の在り方をさらに考えていく必要がある。</li> <li>▲個別の教育支援計画の防災対策の記載については、今後も保健安全部の防災担当と連携しながら継続して記載について検討していく必要がある。</li> </ul>	A (B) C D
来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者にキャリア教育への理解を深めるために、「進路のしおり（仮）」を作成し、PTA総会等の機会を利用して保護者や職員に向けて話す機会を作る。</li> <li>・二期制に伴う個別の教育支援計画のスケジュールを調整し、効果的な運用を図りながら校内支援を推進する。</li> </ul>

分掌	保健安全部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域住民の避難を想定した施設開放、勤務時間外における対応、災害の種類や状況に応じた避難方法等について、改訂した防災マニュアルに基づいて基本方針を確認できた。</li> <li>・職員研修でのD I G訓練を通して、変化する状況に臨機応変に対応することの重要性が意見に挙がるなど危機管理意識を高めることができた。</li> <li>・地震・火災を想定した訓練を通して、初期消火の対応等新たな課題が明らかになった。</li> <li>・「土砂災害に関する避難確保計画」の作成と訓練を実施したことで、土砂災害に対する基本的な知識を得ることができた一方で、備蓄品の保管等に関する課題が明らかになった。</li> <li>・アンケート結果を受けて、保護者向けに防災の取組を説明する機会をもった。</li> <li>・生活支援部と連携し、不審者対応訓練（10月）を実施するとともに、ヒヤリハット・アクシデントについてそれぞれが担う内容の確認と適した報告様式の作成をした。</li> <li>・ヒヤリハット・アクシデント報告内容を全職員で共有するために、校内電子掲示板に閲覧ページを開設したり、「事例検討会」を通して全職員で対応を確認したりしたが、例年と比べヒヤリハット報告件数が減少した。危機管理意識の低下が懸念される。</li> <li>・訓練等を通しててんかん発作時やアレルギー対応等緊急時の基本的な対応を確認できたが、アレルギーについての各学習場面での配慮点の検討や周知については不十分であった。</li> <li>・来年度から新たに始まる「日常的な医療的ケアを必要とする児童生徒のスクールバス乗車」について、手順に従い安全に実施していく。</li> <li>・性教育については、継続した支援につながる記録の残し方について、学校全体で検討する。</li> <li>・Jアラート等を通じて緊急情報が発信された場合の対応について検討する。</li> </ul>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・火災、地震、土砂災害、Jアラート等を通じての緊急情報が発信された場合を想定した訓練と研修を通して、災害に対する職員の危機管理意識を高める。</li> <li>・事故の未然防止の取組や緊急時対応訓練、安全な摂食指導等の取組を通して、日常生活における職員の危機管理意識を高める。</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災やヒヤリハット、摂食指導の担当者を各部に置き、担当者を中心に安全対策を行う。</li> <li>・担任を中心に、看護講師、関係職員で医療的ケア対象及びアレルギーを有する児童生徒を中心に緊急時対応の体制を組む。</li> </ul>
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災マニュアル及び「土砂災害に関する避難確保計画」についての内容を周知する。</li> <li>・事務と連携した初期消火、安全な車いすの下ろし方、垂直避難に応じた電源や備蓄品の確保、長時間を想定した避難等各災害に応じた課題を検討し、より現実に即した訓練を研修と組み合わせて実施すると共に、新たにJアラート等を想定した対応訓練を実施する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活支援部と連携しつつ、ヒヤリハット・アクシデント事例の報告・蓄積意義を再確認し、報告に対する意識を高めるとともに、事例の検討と適時必要な情報の共有を進める。</li> <li>学校生活管理指導表の提出がある児童生徒（8人）について、「個別の取組プラン」を基にアレルギーに関する各学習場面での対応策を保護者と共に確認し、職員間で情報共有を図る。</li> <li>てんかん発作時の緊急措置に対応する際の留意点や手順の理解を図るために、新学期（4月）に医療的ケアに関する職員研修を今年度も継続して実施する。</li> <li>担任と看護講師が連携して、医療的ケア対象及びアレルギーを有する児童生徒を対象とした緊急時対応訓練を、対応マニュアルに基づき適宜実施する。</li> <li>児童生徒が健康な学校生活を送れるよう、保護者や病棟、保健室、担任が連携し、児童生徒の健康状態を把握する。</li> <li>研究研修部と連携し、摂食指導担当者会を毎学期に設け、児童生徒の摂食における問題点を確認し、担当教員に提示する。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害時の危機管理意識を高めるために、昨年度明らかになった課題への対策の検討と確認、防災マニュアル・避難確保計画に基づいた訓練と研修の実施ができたか。</li> <li>日常生活における危機管理意識を高めるために、ヒヤリハット・アクシデントの積極的な報告と情報共有、アレルギー対応に対する「個別の取組プラン」の作成と活用ができたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>防災・減災センターから講師を招き職員研修（マニュアルに基づくシミュレーション訓練）を行った。</li> <li>ミニ命を守る訓練（6回）、地震・火災を想定した命を守る訓練（5月）、市担当者を講師に招いて、土砂災害を想定した命を守る訓練（9月）を実施した。</li> <li>3回の防災対策委員会を開催し、職員研修や避難訓練を通して明らかになった課題（各担当間の連携の観点からの防災マニュアルの見直し、勤務時間外の安否確認の検討、非常持ち出し品や備蓄品の整備等）を検討した。また、一時搬送者の搬送先等、災害時の長良医療センターとの連携を検討している。</li> <li>生活支援部と連携し、命を守る訓練としての不審者対応訓練（10月）を実施した。</li> <li>ヒヤリハット・アクシデントで特に共通理解の必要性が高い事例を検討する「事例検討会」を継続した。</li> <li>医療的ケアについて、指導医への相談や保護者との懇談等連携を密にしつつ、24時間人工呼吸器を使用する児童等への体調の変化に応じた医療的ケアを安全に実施した。</li> <li>緊急時対応マニュアルを作成し、対応方法や搬送先等一人一人に異なる対応について関係する職員間で確認した。</li> <li>新規作成した「個別の取組プラン」や「調理活動届」、見直した「給食アレルギー対応表」の活用により、給食と学習場面でのアレルギーに関する配慮事項を関係職員で確認し、情報共有を図った。</li> <li>産業医の指導を受け、二次調理室の衛生管理の整備を行った。</li> <li>学期に1回、摂食担当者会を開催し、担当者、担任、養護教諭それぞれが持つ情報を共有しながら、支援を必要とする児童生徒のについて安全な摂食のための具体的な支援方法を校内担当者で確認した。</li> <li>県指定の様式を基に、安全点検表の見直しを行った。</li> </ul>
評価の視点	評価
①災害時の危機管理意識を高めるために、昨年度明らかになった課題への対策の検討と確認、防災マニュアル・避難確保計画に基づいた訓練と研修の実施ができたか。	Ⓐ B C D
②日常生活における危機管理意識を高めるために、ヒヤリハット・アクシデントの積極的な報告と情報共有、アレルギー対応に対する「個別の取組プラン」の作成と活用ができたか。	A Ⓑ C D
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>○職員研修や命を守る訓練を通して、分掌毎の任務遂行に向けての課題の検討やマニュアルの再検討を通して、職員の危機管理意識を高めることができた。</li> <li>○「緊急時対応マニュアル」の作成を通して、個々に異なる実態や緊急時対応について関係する職員で確認することができた。</li> <li>○「調理活動届」の作成・活用により、食物アレルギーのある児童生徒への職員の意識を高めることができた。</li> <li>▲想定される災害時に、より安全で現実的な対応ができるよう長良医療センターとの連携を進める。</li> <li>▲増加する訪問生の保護者への防災に関する理解・啓発を進める必要性があるので、自宅での防災に関する情報提供等を行っていく。</li> <li>▲「緊急時対応マニュアル」を作成したが、訓練等による活用や内容の検討まではできなかった。</li> <li>▲ヒヤリハット・アクシデント報告数は年間を通して一定の報告はあった。今後も報告の意義を再確認するなど、安全に関する意識が高まるような職員への働きかけを継続していく。</li> <li>▲摂食に関わる業務の見直しを、摂食担当者会の在り方も含め再検討する。</li> </ul>	A Ⓑ C D

来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長良医療センターとの連携を進め、一時避難場所として長良医療センターの施設を使用する内容の訓練を計画・実施し、安全で現実的な避難行動をとることができるようにする。</li> <li>・緊急時への危機管理意識と対応する力を高めるために、「緊急時対応マニュアル」に基づいた訓練を実施する。</li> </ul>
-----------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

分掌	研究研修部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題研究については、アセスメント等に基づいた児童生徒の具体的な目標設定を行う取組に加え、PDCAの過程において実践の評価を行い授業改善につなげる取り組みを充実させることが課題である。今年度は2年研究の最終年であり、実践の成果と課題を実践集録にまとめる。</li> <li>・夏季休業中に研修期間を設定し、他分掌と連携して職員の専門性を向上するための職員研修会や、自主的な学習会を積極的に計画、実施することができた。この取組を継続させるとともに、病気や障がいにかかわる最新情報についてや、新学習指導要領への対応といった今日的な課題についての研修を実施していく。</li> <li>・校外で実施される研修会や研究会の情報を校内電子掲示板の活用や朝礼の連絡等で全職員に周知し、参加を呼びかけた。それをきっかけにして参加へとつなげることができたが、校外の研修等の情報が多く、従来の周知方法では分かりにくいという意見が聞かれた。</li> <li>・新たな業務として、今年度から教科等部会を担当する。また、特教研の研究大会（7月）や来年度の事務局担当を控え、計画的に準備に取り組む必要がある。</li> </ul>
今年度の具体的なかつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PDCAサイクルを基盤として授業改善を推進し、児童生徒の主体性や社会とかかわる力を高める。</li> <li>・各種研修会や教科等部会の取組を通して、職員の専門性や実践力の向上を図る。</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究チーフ会の機能向上を図るため、経験等を踏まえ全校体制でグループチーフの人選を行う。</li> <li>・実践集録の作成に向けて、二学期半ばに作成方法やスケジュールを提示し、計画的に進める。</li> <li>・特別支援教育及び病弱教育に対する専門性を高めるための研修会や自主学習会を、他分掌やコア・ティーチャー等と連携して計画、実施する。</li> <li>・特教研評議委員を専任とし、研究大会や事務局担当に向けての準備を行う。また、主事会や他分掌とも連携し、全校体制で準備作業を行う。</li> </ul>
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒の実態把握のためにアセスメント等を実施し、具体的な目標設定を行ったり実践内容を設定したりする。</li> <li>・全グループが研究の対象となる実践の単元計画を作成し、それを基にPDCAサイクルを基盤とした授業改善に取り組む。また、それを基に研究授業（事前・事後研究会を含む）や実践交流会を行い、更なる授業改善に生かす。</li> <li>・7月の特教研研究大会において本校の実践を発表し、事後研究会で得られた方策等をその後の実践に生かす。</li> <li>・研究チーフ会で各研究グループの進捗状況や課題等を把握し、解決策や全体の方向性を共通理解し、全体や各グループ会へ提示していく。</li> <li>・夏季休業中に職員研修期間を設け、職員の専門性を高めるための研修会や学習会を実施する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員のニーズに応じた内容や今日的な課題を取り上げた学習会を随時計画、実施する。</li> <li>・教科等部会において、実践交流を行うことで教科等の指導力向上を図るとともに、新学習指導要領に示されている各教科等の「見方・考え方」についても内容理解をすすめる。</li> <li>・校外で行われる研修会等の職員への周知方法について、電子掲示板や朝礼での周知といった従来の方法に加え、研修内容に見合った部や学習グループに直接周知するなどの工夫を行う。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PDCAサイクルを基盤とし、児童生徒の主体性や社会とかかわる力を高めるために授業改善の取組を行うことができたか。</li> <li>・各種研修会や教科等部会での研修や学習会が、職員の専門性や実践力を高めるための有意義な取組になったか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例対象児童生徒に対してアセスメントや観察を通して実態把握を行い、それを基に目標設定を行った。また、学期に1回、研究の対象となる実践の単元（活動）計画を作成し、それを基にPDCAサイクルを基盤とした授業実践と改善に取り組み、児童生徒の成長や課題についてまとめた。</li> <li>・一・二学期に1回ずつの研究授業週間を設定し、7つの研究授業を実施した。また、二学期の研究授業週間では、単元計画を使用し、指導案作成に対する教員の負担軽減を図った。研究授業に伴う事前・事後研究会では、事前に協議内容を提示するとともに、必要に応じて授業VTRを活用するなどの工夫を行った。</li> <li>・夏季休業中に研修期間を設定し、他分掌と連携して職員の専門性を向上するための研修会を実施した。</li> <li>・校外で実施される研修会の情報を、校内電子掲示板や職員室の掲示板で全職員に周知した。また、特に重要と思われる研修については、対象と思われる職員に回覧したり学習会の際に紹介したりして、参加を呼びかけた。</li> <li>・職員へ学習会に関するアンケートを実施、ニーズに応じた学習会を企画、実施した（4月：摂食指導）、9月：スイッチ、12月：精神疾患児への支援）。</li> </ul>
評価の視点	評価
①PDCAサイクルを基盤とし、児童生徒の主体性や社会とかかわる力を高めるために授業改善の取組を行うことができたか。	A (B) C D
②各種研修会や教科等部会での研修や学習会が、職員の専門性や実践力を高めるための有意義な取組になったか。	A (B) C D
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究チーム会にて各研究グループ内の実践状況を把握し、方向性を確認することで、共通認識のもとで計画的に実践や研究授業を進めることができた。</li> <li>○新学習指導要領の観点に基づいて単元（活動）計画を作成したことで、教員間で目標や授業内容を共通理解して実践を進めていくことができた。また、研究授業は指導案を作成せず、単元計画を使用したことで、負担軽減を図ることができた。</li> <li>○二学期の研究授業の事後研究会や実践交流を踏まえて授業改善を行い、二学期以降の実践に生かすなど、PDCAサイクルを意識した取組を行うことができた。</li> <li>○夏季職員研修後のアンケートでは、児童生徒理解や指導・支援方法への参考になり有意義であったという意見が多くあった。</li> <li>○自主学習会では職員に対して希望調査を行い、職員のニーズに対応した内容を取り上げて行い、多くの職員の参加があった。</li> <li>○外部研修会や研究会の情報周知を随時行ったり職員図書を斡旋したりすることで、職員の研修会や研究会への参加や、図書の購入といった動きにつなげることができた。</li> <li>▲研究グループ会に十分な時間が取れず、各グループで取組方に差があった。実践交流の機会を多く設け、お互いに授業について話ができる時間を設けていきたい。</li> <li>▲病弱教育の専門性を高めるために、病気や医療の最新の情報や、新学習指導要領に基づく授業実践についての研修を継続して計画していく必要がある。</li> <li>▲自主学習会では、コア・ティーチャーが行う学習会と内容が重複することがあった。今後は、コア・ティーチャーと連携し、職員のニーズに合わせた学習会を計画していく必要がある。</li> <li>▲校外研修の案内が多く、掲示板に載せる業務を担当する職員の負担が大きかった。効率的な案内の方法を検討していく必要がある。</li> </ul>	A (B) C D
来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の研究成果と課題を踏まえ、来年度は新しい研究テーマを設定し実践に取り組む。</li> <li>・職員研修について、筋ジス、慢性疾患・難病、重度心身障がいに関わる内容を数年ごとに研修できるよう計画していく。また、コア・ティーチャーと連携し、病弱教育専門分野や職員のニーズに応じた学習会を計画する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部研修により多くの職員が参加できるよう、研修内容に見合った部や学習グループに直接周知するなどの工夫を行う。</li> </ul>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------

分掌	渉外部
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度から新しくなった二つの専門委員会「研修委員会」「広報・環境委員会」のそれぞれの活動に対し、保護者が自主的・積極的に取り組めるよう支援した。そのことによって、研修委員の方は地域交流講座での司会や受付等新しいことに自主的に取り組む方が多くみられた。地域交流講座やPTフォーラム等の参加者も増えた。広報・環境委員の方で学校に来て活動することが難しい方は「すまいるながら」「しゃべりっちなながら」の発行に向けての活動、ベルマークの整理等を家庭で行えるよう支援したことにより、訪問生の保護者も活動することができた。</li> <li>「ふれあいの日」の企画・運営に、PTA役員の方が中心となって、二つの専門委員会の方たちが力を合わせて取り組んだ。初めての試みだったので、全員が活動しやすいように支援を工夫した。</li> <li>保護者同士の交流の場である「PTAの日」として、元本校保護者による「プリザーブドフラワーの小さなコサージュ作り」を1月に行うことができた。</li> <li>地域との交流活動として「ふれあいの日」「地域交流講座」等を実施し、長良5校のPTA・個人ボランティアの方たちとの交流を図った。同じ親としての思いを共有することができた。また、本校保護者と地域の方と一緒に活動する場を設定することによって、地域の方との交流を深めることができた。</li> </ul>
今年度の具体的なかつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>本校保護者の実情を踏まえた上でPTA組織と活動内容が適切かを見極めて各専門委員会を運営し、保護者同士の交流を深めるとともに自主的・積極的に取り組めるよう支援する。</li> <li>「ふれあいの日」が、積極的な交流の場となるよう計画・実施する。</li> </ul>
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>他分掌と連携し、PTA関係行事を実施できるよう協力体制を整える。</li> <li>渉外部とPTA理事会が連携し、学校職員と保護者の協力体制を確立する。</li> <li>地域（長良5校PTAや個人ボランティアの方）と連携し、協力体制を構築する。</li> </ul>
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>PTA組織と活動内容が適切かどうかを見極めながら、各専門委員会が、保護者のニーズに合った活動を自主的・積極的に計画実施できるように支援していく。また、他分掌と連携して「ふれあいの日」や「地域交流講座」等の内容を検討しながら実施することで、保護者のニーズに応えていけるようにする。</li> <li>二つの専門委員会の中で、来校することが難しい保護者とも交流できる方法を保護者と一緒に考える。また、家庭でできることに取り組むことができるよう支援する。</li> <li>「ふれあいの日」が、交流の場として、より積極的に取り組める内容を検討し、全校体制で臨めるよう、計画・実施していく。</li> <li>PTA会員全員で「ふれあいの日」を運営できるよう、支援していく。</li> <li>「地域とともに歩むPTA活動」の柱である「地域交流活動」は、長良5校PTAや個人ボランティアの方等との交流を通して、本校や児童生徒の理解を深めてもらっているため、本校保護者から地域の方に積</li> </ul>

	極的にかかわれるよう支援していく。
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PTA組織と活動内容が適切かを見極め、自主的・積極的に取り組めるよう支援できたか。</li> <li>・本校保護者の実情を踏まえた上で、各専門委員会を運営し、保護者同士の交流を深めるとともに、PTA活動への参加を促していくことができたか。</li> <li>・「PTAふれあいの日実行委員会」が企画・運営を行うに当たって、PTA会員全員が活動しやすいように支援できたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度から専門委員会を二つにし、それぞれの活動に対し、保護者ができるだけ自主的・積極的に取り組めるように支援した。PTA行事への参加者が増えるように、来年度に向けての改善案について会長・副会長を中心に、理事全員で考えることができるよう支援した。</li> <li>・研修委員の方に地域交流講座やPTフォーラム等への参加や受付・司会・お礼の言葉等の係の割り振りを最初の専門委員会で決めることによって、一年間の活動へ見通しをもって取り組めるよう支援した。広報・環境委員の方には「すまいるながら」「しゃべりっちなながら」の発行に向けての活動、ベルマークの整理等を家庭でも行えるような支援をした。また「しゃべりっちなながら」の紙組みを保護者が学校で行えるように支援した。</li> <li>・PTA会則改正検討委員会を何回か開き、会則の見直しをすることによって、PTA役員の役割やPTA行事についての意識を役員が高めることができた。</li> <li>・保護者同士の交流の場である「PTAの日」をPTA役員が中心となり実施できるよう支援した。また、在宅訪問生の保護者が参加しやすいよう学校としてできることを検討した。</li> <li>・保護者が積極的に取り組める場としての「ふれあいの日」を目指して、PTA食品バザー等の役割分担の希望調査を見直し、保護者の役割を割り振りし、一人一人の負担が大きくなるよう配慮した。また、学校に来ることができない保護者が家庭で準備できるよう支援した。</li> <li>・児童生徒や保護者の実態に合わせ、昨年度に引き続き、時間短縮、内容の精選を図りながら地域との交流行事として実施した。</li> </ul>
評価の視点	評価
①本校保護者の実情を踏まえた上でPTA組織と活動内容が適切かを見極めて各専門委員会を運営し、保護者同士の交流を深めるとともに自主的・積極的に取り組めるように支援することができたか。	A (B) C D
②「ふれあいの日」が、積極的な交流の場となるよう計画・実施できたか。	A (B) C D
成果・課題	総合評価
<p>○事前に役割を決められるよう支援したことでPTA行事への参加の見通しをもちやすくしたため、PTA行事への参加者が前年度より増えた。</p> <p>○訪問生の保護者を含め、PTA会員が参加しやすいよう、「PTAの日」を保護者が自主的に企画・運営できるように支援することができた。PTA会員が主体となって親睦会を3回実施することができた。</p> <p>○「ふれあいの日」は、本校保護者と地域の方が一緒に活動する場を設定したことから、地域の方との交流をさらに深めることができた。</p> <p>○PTA食品バザーの仕入れ方法を変えたことにより、事前業務が大きく減ったので、一部のPTA会員に負担がかかるという不公平感が薄らぎ、保護者同士の関係が良好な状態で活動を行うことができた。また、学校に来ることができない保護者が家庭で準備できるよう支援したことにより、活動に参加できる保護者が増えた。</p> <p>○「ふれあいの日」について、各分掌・各部の役割分担を明確にし、全校体制で取り組むことができた。</p> <p>▲「地域交流講座」「ふれあいの日」「日常の授業支援」等、地域交流活動に対する地域の方々の意識が高い。「地域交流講座」に関しては、本校保護者の参加が増えたとはいえ、まだ地域の方々の参加の方がとても多い。本校保護者の参加を増やすために、内容を工夫したり回数を検討したりすることが課題である。</p> <p>▲「しゃべりっちなながら」の原稿の集まりがよくないので、改善策を広報・環境委員と一緒に検討していくことが課題である。</p> <p>▲「ふれあいの日」を縮小したことに対して、「もっと盛り上げたい」という役員からの意見が挙がったので、保護者の気持ちを大切にしつつ、本校の実情に適した行事となるように調整していくことが課題である。</p>	A (B) C D

<p>来年度に向けた課題と改善方策案</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校での活動や研修会に参加できない保護者には、家庭でできることを自分で選んで取り組んでいただき、PTA会員全員が繋がることのできるPTA活動ができるように、さらに支援していく。</li> <li>・ふれあいの日実行委員中心となってふれあいの日を企画・運営していくためにふれあいの日実行委員会の内容や実施回数について検討していく。</li> <li>・「地域交流講座」の回数を3回に減らし、内容についてPTA会員と地域の方が参加しやすいように役員と一緒に検討していく。</li> </ul>
------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

分掌	病弱教育支援センター
<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校及び高等学校からの依頼に対して、迅速に訪問支援を実施した。そうした訪問支援の依頼には、不登校等かなり状態が深刻化した内容の相談依頼が多かった。</li> <li>・年度末に就学や進学についての相談が入ることがあった。</li> <li>・生徒が入院している病院から教育についての相談があり、その後の継続支援につなげることができた。</li> <li>・病弱教育支援センターの広報活動が全校職員体制で各種会議等の場においてパンフレットの配付や説明を通し実施できた。しかし、多くの会議では配布のみにとどまり詳しい説明には至らなかった。</li> <li>・夏季研修の公開や研修会への講師派遣を通し、地域の教員に対して、病弱教育についての専門性向上の支援をすることができた。</li> <li>・岐阜西濃中濃圏域の特別支援学校病弱学級担当者連携会議を実施し、病弱教育に関する情報提供や遠隔授業等の新しい授業形態の提案をすることができた。また遠隔授業については実践につなげることができた。</li> <li>・岐阜圏域外からの相談に対し、各特別支援学校の支援センターと連携し対応できた。</li> <li>・連携機関と協力し「幼児相談室」を実施した。また連携していない機関からも新たな未就学児の紹介があった。</li> </ul>
<p>今年度の具体的かつ明確な重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校及び高等学校の教職員に対する病弱教育の支援を実施する。</li> <li>・特別支援学校病弱学級担当者の専門性向上への支援を実施する。</li> <li>・未就学児の保護者の支援を早期から積極的に行う。</li> </ul>
<p>重点目標を達成するための校内組織体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各部や各分掌等と協力の下、計画的に関係機関を訪問し連携を進め、外部支援を迅速に行っていく。</li> <li>・外部支援の状況を管理職、病弱教育支援センター職員、コア・ティーチャー等で共有し、迅速に支援に当たるようにする。</li> </ul>
<p>目標の達成に必要な具体的取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病弱教育支援センターの具体的な活動内容を説明するために、関係機関を訪問したり、本校のホームページに具体的な活動内容を紹介したりして積極的に広報活動を行う。</li> <li>・病弱教育の相談依頼に対し必要に応じて学校訪問を行い、依頼先の担当者との懇談等から本校ができる支援を明確にする。またコア・ティーチャーとの連携等全校体制で支援を実施する。</li> <li>・支援の状況を記録の回覧や会議での報告を通して、外部支援担当者間で共有し、外部からの問い合わせ等</li> </ul>

	<p>に迅速に対応する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岐阜圏域外からの病弱教育の相談に対して、各特別支援学校の支援センターと協力し対応する。</li> <li>・特別支援学校病弱学級担当者の困り感に対する支援を連携会議や訪問支援等を通して実施する。</li> <li>・連携会議の内容については、今年度の参加校からのアンケート等を参考にし、参加者の困り感に具体的に伝えていく。</li> <li>・ICT機器利用の具体的な実践方法を積極的に紹介する。</li> <li>・連携する関係機関を増やすとともに、それらを直接訪問し「幼児相談室」の活動内容や趣旨を説明する。</li> </ul>
達成度の判断・判定基準 あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校及び高等学校の教職員に対する支援ができたか。</li> <li>・特別支援学校病弱学級担当者の専門性向上への支援ができたか。</li> <li>・未就学児の保護者の支援を早期から積極的に行うことができたか。</li> </ul>
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校及び高等学校や特別支援学校への訪問支援をコーディネーターとコア・ティーチャーが協力して実施した。</li> <li>・外部の保護者・各市町の教育委員会職員・医療機関職員等からの相談に対し、電話や訪問支援等で丁寧にそして迅速に対応した。</li> <li>・本校の外部支援を広く広報するため、特別支援教育コーディネーターの会議や地域で病弱児童生徒を療育する担当者の会議等で広報活動をししたり、ホームページに情報を公開したりした。</li> <li>・外部支援の状況をセンター会及び報告書により随時担当者間で共有し、組織として外部からの相談に対応した。</li> <li>・岐阜地区の院内学級担当者会や公開職員研修会にて病弱教育の専門性向上に向けての支援を実施した。</li> <li>・特別支援学校病弱教育担当者の困り感を把握しそれらを解決するための会議を実施した。また会議を他校に移し病弱教育の学校間交流等もできた。</li> <li>・病弱教育における進路支援について、外部講師による研修会やWeb会議システムを利用した支援等が積極的に行えた。</li> <li>・関係機関から対象児の紹介を受け、「幼児相談室」を実施した。</li> <li>・新たに訪問看護ステーション協会と連携したり、重症心身障がい児療育研究会の研修会において広報活動を行ったりした。</li> </ul>
評価の視点	評価
①小・中学校及び高等学校の教職員に対する病弱教育の支援が実施できたか。	A (B) C D
②特別支援学校病弱学級担当者の専門性向上への支援が実施できたか。	(A) B C D
③未就学児の保護者の支援を早期から積極的に行えたか。	A (B) C D
成果・課題	総合評価
<p>○訪問支援の継続実施や各種広報活動の実施により、本校の訪問支援を周知することができ、重症化する前の相談にも対応することができるようになってきた。</p> <p>○訪問支援に際してはコーディネーターやコア・ティーチャーを初めとして各分野の専門性を十分に活用し、学校組織として支援することができた。</p> <p>○岐阜圏域の院内学級への訪問支援や、院内学級担当者の定例会議の本校での開催等を通して、お互いに気軽に相談し合える連携体制が構築できた。</p> <p>○特別支援学校病弱教育担当者会を開催し担当者の課題解決への支援ができた。</p> <p>○web会議システムを利用することにより、圏域を広げて病弱教育担当者や病弱の児童生徒への進路支援ができた。</p> <p>○外部講師の研修会実施により、ICT機器を利用した進路支援の新しい動向についての情報提供等、専門性向上への支援ができた。</p> <p>○関係機関から情報提供を受け、実際に保護者の相談支援が実施できた。</p> <p>▲外部支援の広報先の開拓等、広報活動の充実を図る。</p> <p>▲特別支援学校病弱教育担当者の困り感の把握や専門性向上の支援を継続する。</p> <p>▲圏域を広げた特別支援学校病弱教育担当者への支援を実施する。</p> <p>▲対象の幼児や保護者の支援を実施するために、広報活動の工夫や継続をする。</p>	A (B) C D
来年度に向けた課題と改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校や高等学校及び地域で病弱の児童生徒への療育に関わる機関等へ積極的に広報活動を実施する。</li> <li>・特別支援学校の病弱教育担当者の専門性向上への支援を、会議や訪問支援及びWeb会議システム等の新たな取組等を通して実施する。</li> <li>・重症心身障がい児の保護者の支援の充実を図るために、「幼児相談室」の広報活動として、連携体制を結ぶ新たな機関の開拓や内容の工夫をする。</li> </ul>

学校関係者評価 (第1回平成30年6月18日、第2回平成31年2月4日 実施)

意見・要望・評価等

第1回学校評議委員会

①教育活動に関することについて

意見1：児童生徒が元気いっぱい、自分の力を発揮していたので感激した。どのような形でもよいので、役に立ちたいと考えている。

意見2：授業がよく工夫されていた。一人一人の目標が設定されており、達成したことを教員が児童生徒と一緒に喜ぶところがよかった。

意見3：実習を受け入れているが、生徒と接していると素直で、笑顔があふれている。先生方の質の高さ、児童生徒に心を寄せている様が見てとれた。体温調節が難しい子への対応や、カーテンをして目隠しをするなど環境も整えられていた。

意見4：小学部、中学部、高等部で学級分けも細かくされて、様々な障がいの子への対応がなされていた。集団で行動することは難しいと思うが、社会に出る前の段階なので、集団での取組も大切だと思う。

②防災に関すること

意見1：高等部の身体の高い生徒が床に降りていると、車いすに乗せることもたいへんになる。様々な子に対応することは難しいが、細部にも気を付けながら行うことが大切である。学校で起きたことは、学校の責任になってしまうので、十分に気を遣って取り組んでいただきたい。

回答1：学校は何もなくて当たり前場所である。児童生徒の命にかかわること、怪我等がないように、考えられるところをすべてやっておかなければならない。防災対策についても、今までは型にはまったところがあった。当校の場合、避難するときには医療センターと連携しなくてはならない。そのために、どこへ逃げたらよいのか考えないといけない。夏季休業中にも防災士に来ていただいて、シミュレーションの機会をもつ。考え付くことをやっていきたいので、気が付かれることをその都度教えていただきたい。

回答2：本年度もいろいろな想定をしながらの訓練を考えている。日常的に起こるヒヤリハットも出し合いながら、職員の危機管理意識を高めていきたい。

③キャリア教育、卒業後に向けての支援について

意見1：単純作業であるが、集中力だけでなく、報告すること、状況を把握して伝えることなど「報・連・相」が大事になる。これは社会人への第一歩といえる。また、素直なこと、明るくあいさつができることも大切である。

意見2：学校在学中の子は、学校がその子や家族について把握して、サポートしているため安心である。学校を卒業後にどこへつなげるかが問題である。卒業後、その子その子に合ったところにつないでいくことが大切だが、社会へ出てからどこへお願いするのか、サポートするのか悩むところである。本人、ご家族と長くかかわることができるように、医療としても一緒に考えていきたい。

第2回学校評議委員会

①平成30年度 部・分掌の成果と課題について

意見1：学校祭を見て、子どもたちの頑張りもそうだが、先生方の取組も素晴らしい。その場の雰囲気も良く、とても感動した。

意見2：居住地の学校との交流が多く、行うことは双方にとって良いことになっていると思われる。PTAも地域との交流が盛んで、素敵なことである。地域の小中学校との交流は、全員が対象であるか。

回答1：居住地校交流は、小中学部の希望する児童生徒が参加している。直接交流の他に手紙等のやり取りをする間接交流も行っている。

②児童生徒の活躍等

意見1：漢字検定への取組は素晴らしい。準2級や2級の合格者を出していることに、生徒本人の努力もあるが、先生方のご指導も素晴らしいと感じている。

意見2：いろいろな取組は、結果ダメでもチャレンジすることは大切である。その子その子の能力、関心をキャッチして引き出してほしい。

意見3：遠隔授業の取組について、共感の場をもつことは良いことである。テレビの番組(ハートネット)で、ロボットがお茶を出し、遠隔で接客し生き生きと働く姿があった。会話が広がる。今後に期待している。

回答1：小学部の集会場面では、病院とカメラを通すことで、本人、保護者ともよりつながった感想をもったようである。

意見4：地域の人々や学校の中でも、いろいろな人とつながることは大切である。ハローワーク等外部機関と早いうちに連携されていることは良いことで、社会に出てからではつながることが難しくなる。保護者は将来の見通しをもてずに心配している。学校にいる間につながっておくことが大切である。

意見5：学校だよりを町内だけでなく、公民館にも配付した方が良いのではないか。高齢者の方の利用もあり、記事にされた時に多くの方が目にする機会を設けたほうがよい。

回答2：検討して、依頼させていただく。

回答3：効果的な広報のあり方も重要だと考え行っていきたい。教員等が気付かない点は、事務側で発信し、意識改革にあたりたい。